

Economic Monitor

所 長 三輪裕範 03-3497-3675 miwa-y@itochu.co.jp
主任研究員 丸山義正 03-3497-6284 maruyama-yo@itochu.co.jp

日本の 2013 年 7～9 月期貿易動向

7～9 月期は輸出低迷と輸入増加により貿易赤字が拡大。日本の貿易赤字は過去最高水準で一進一退の推移。7～9 月期の輸入低迷には新興国向け、特に ASEAN 向けの低迷が寄与。但し、日本の ASEAN 向け輸出で最大シェアを占めるタイ向けは、今後回復が期待される。輸入増加には、国内最終需要の拡大に加え、消費税率引き上げ前の駆け込み需要に備えた在庫積み増しも寄与。

7～9 月期の貿易赤字は過去最大

日本の 2013 年 7～9 月期の貿易収支は 2 兆 9,317 億円の赤字となり、赤字幅が 4～6 月期の 2 兆 647 億円から大幅に拡大、四半期ベースで過去最大を記録した。季節調整値で見ても、4～6 月期の 2 兆 1,759 億円から、2 兆 8,453 億円へ赤字幅が膨らんでいる。

7～9 月期の赤字拡大に寄与した輸入の増勢は、4～6 月期の抑制の反動による部分大きい。そこで、4～6 月期と 7～9 月期の平均を見ると 2 兆 5,106 億円となり、1～3 月期の 2 兆 6,711 億円からほぼ横ばいである。日本の貿易赤字は 2013 年に入り、過去最高水準で一進一退で推移していると判断される。

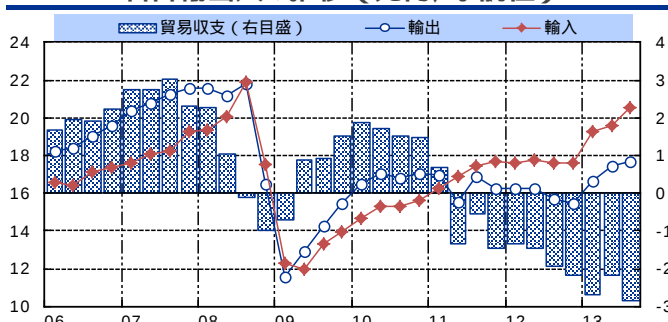
7～9 月期の輸出は低調

7～9 月期の赤字拡大には、輸出の伸び鈍化と輸入拡大が寄与した。7～9 月期に輸出は名目ベースで前期比 1.4%増加したものの、4～6 月期の 4.8%から大幅に減速している¹。更に、為替など輸出価格の変動を除いた実質ベースでは、前期比 0.2%(4～6 月期 1.7%)とほぼ横ばいにとどまっており、輸出は 7～9 月期に低調だったと判断できる²。円安による輸出拡大効果は残存しているが、需要減少の影響が勝ったと考えられる。なお、後述するように、仕向け地別には ASEAN や NIEs 向けの落ち込みが目立つ。

輸入は増勢を取り戻す

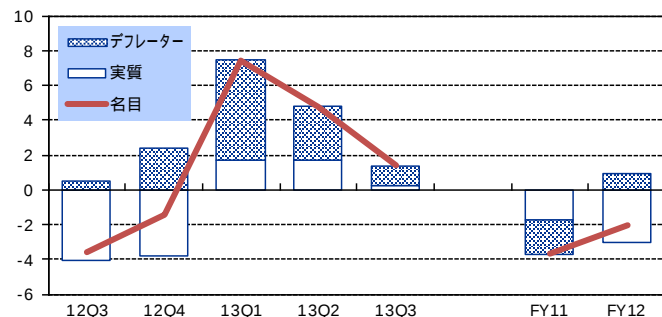
一方、輸入は 7～9 月期に名目ベースで前期比 4.6%(4～6 月期 1.6%)、実質ベースでも 3.0%(4～6 月期 0.3%)と拡大ペースが加速した。こうした輸入の増勢には、国内最終需要の堅調推移や、前期に輸入を

名目輸出入の推移 (兆円、季調値)



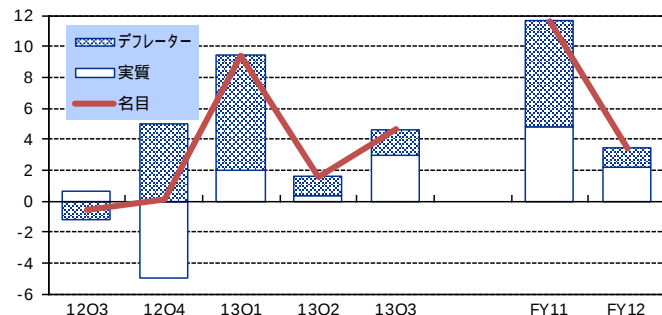
(出所) 財務省

名目輸出の推移 (季調値、前期比、前年比、%)



(出所) 財務省、日本銀行

名目輸入の推移 (季調値、前期比、前年比、%)



(出所) 財務省、日本銀行

¹ 7～9 月期の輸出は前年比で 12.7%(4～6 月期 7.1%)と伸びを高めたが、これは前年同様に日中間のトラブルで落ち込んだ反動に過ぎない。

² 当社は概況品毎に実質化し、実質輸出入を試算している。本稿の輸出入デフレーターは実質輸出入と名目輸出入から計算した。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、伊藤忠経済研究所が信頼できると判断した情報に基づき作成しておりますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。記載内容は、伊藤忠商事ないしはその関連会社の投資方針と整合的であるとは限りません。

抑制したために減少した在庫の補填、消費税率引き上げ前の駆け込み需要に備えた原材料など生産財輸入の拡大も影響したと考えられる。

以下では、当社試算の実質輸出入に基づき、輸出について仕向け地別に、輸入については品目別に動向を振り返る。

1. 輸出

(1) 対世界: 新興国向けが低調

7～9 月期に実質輸出は、前述のとおり、前期比 0.2%（4～6 月期 1.7%）とほぼ横ばいにとどまった。

仕向け地別に見ると、EU 向けが前期比 6.7%（4～6 月期 ▲0.4%）と一人気を吐いたが、他は米国向け ▲1.4%（4～6 月期 7.7%）、アジア向け ▲1.2%（4～6 月期 2.0%）、中東向け ▲5.3%（4～6 月期 10.5%）、ロシア向け ▲12.5%（4～6 月期 ▲10.6%）と軒並み減少している。

後述するように、米国向けの減少は 4～6 月期に急増した反動が大きいものの、先行きは財政問題の影響が懸念される。また、アジア向けを中心とした新興国向けについては、国別に濃淡はあるものの、景気回復の遅れが全体として見れば未だ解消に至っていない影響が大きいと考えられる。世界全体をカバーする訳ではないが、OECD 景気先行指数³に基づけば、先進国の景気循環が上向く一方で、アジア新興国の景気回復に遅れが生じていることが読み取れる。

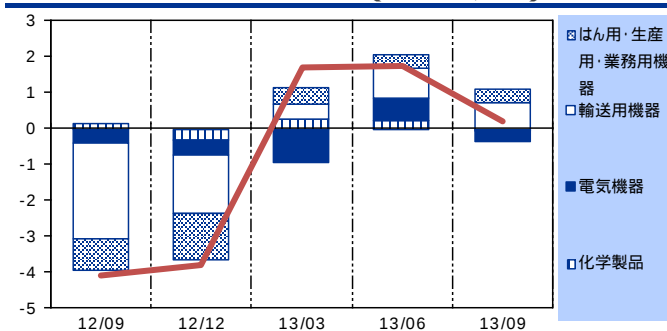
7～9 月期の実質輸出を品目別に見ると、設備投資関連が多いはん用・生産用・業務用機器や自動車が主力の輸送用機器は拡大基調を維持したが、電気機器の低迷が、輸出全体の足を引っ張った。

(2) 対アジア: 中国向け復調も ASEAN や NIEs 向けが落ち込む

アジア向け輸出は 7～9 月期に前期比 ▲1.2%（4～6 月期 2.0%）と 3 四半期ぶりに減少した。

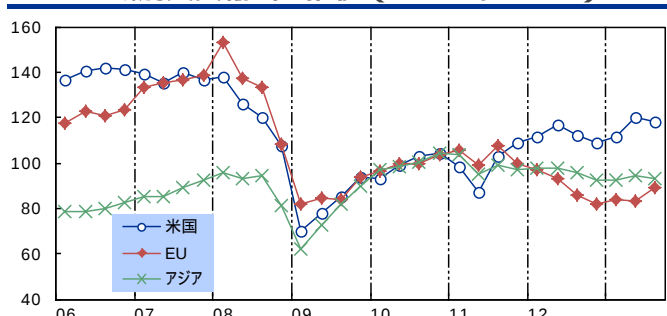
中国向けは前期比 2.7%（4～6 月期 3.7%）と 3 四半期連続で増加したものの、ASEAN 向けが ▲7.2%（4～6 月期 1.3%）、NIEs 向けも ▲3.8%（4～6 月期 3.0%）

実質輸出：対世界（前期比、%）



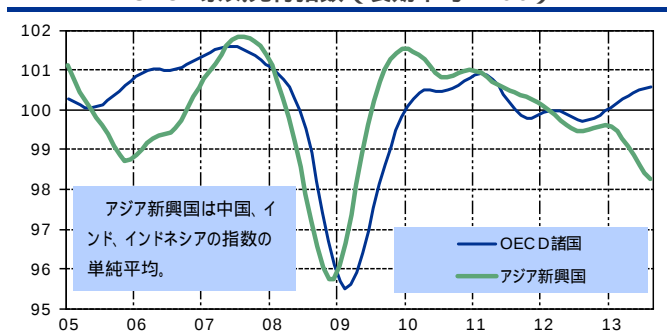
（出所）財務省、日本銀行

地域別実質輸出の推移（2010年=100）



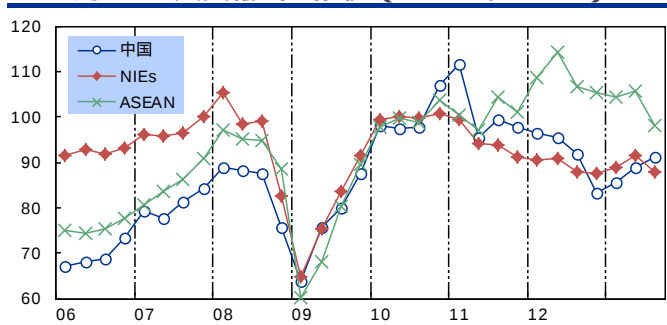
（出所）財務省、日本銀行

OECD 景気先行指数（長期平均=100）



（出所）OECD

対アジア実質輸出の推移（2010年=100）



（出所）財務省、日本銀行

³ OECD の機関としての性格上、新興国のカバレッジは小さい。

と落ち込み、アジア向け全体では減少を余儀なくされている。

中国向けは回復の動き

中国向けは、昨年の中中間トラブルによる悪影響が緩和されてきたところに、減速の続いてきた中国経済が漸く底入れしたことから、3 四半期連続で増加した。品目別には、はん用・生産用・業務用機器の伸びが目立った。

ASEAN 向けの低迷にはタイ向けの落ち込みが影響

ASEAN向け輸出は低調だったが、ASEAN構成国向け全てが大きく落ち込んだ訳ではない。7～9 月期に落ち込みが顕著なのはタイ向けであり、名目輸出ベースで前年比▲1.4%とASEAN主要国向けで唯一、前年水準を下回った⁴。一方、インドネシアやフィリピン、マレーシア、シンガポール向けの輸出は増勢を維持した。

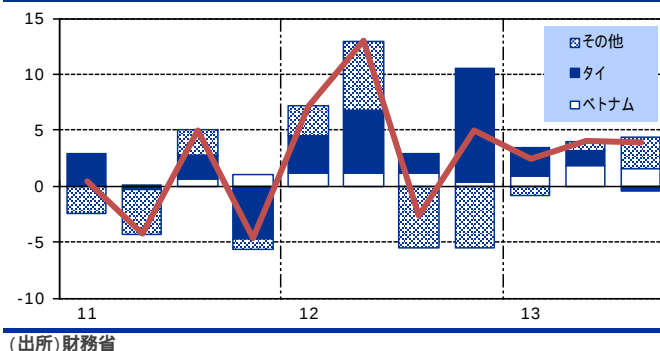
タイは、ASEAN域内の経済規模で見ると2 割程度（IMFによるPPPベース、2012 年）を占めるが、日本のASEAN向け輸出は3 分の1 がタイ向けである。そのウェイトの大きいタイ向け輸出の減少が、7～9 月期はASEAN向け輸出全体の大幅な落ち込みに繋がったと判断される。タイ経済は2013 年1～3 月期、4～6 月期と2 四半期連続の前期比マイナス成長に陥り、日本からの輸出にも悪影響が及んでいる。需要喚起策の反動もあって国内自動車販売が落ち込み、自動車輸入の減少に繋がっているほか、これまでのパーツ高で国内製造業に悪影響が及んだため設備投資向けの資本財輸入も伸びていない。但し、パーツ高の修正を受けて、タイ経済は今後回復へ向かい⁵、政策で歪みが生じた自動車販売も徐々に増加トレンドへ回復すると考えられる。タイ経済が回復へ向かうに連れ、日本のタイ向け輸出ひいてはASEAN向け輸出も徐々に増勢を取り戻すと考えられる。

NIEs 向けについては、電気機器や輸送用機器が落ち込み、全体を押し下げた。但し、半導体製造装置などを中心に、はん用・生産用・業務用機器には持ち直しの動きが見られた

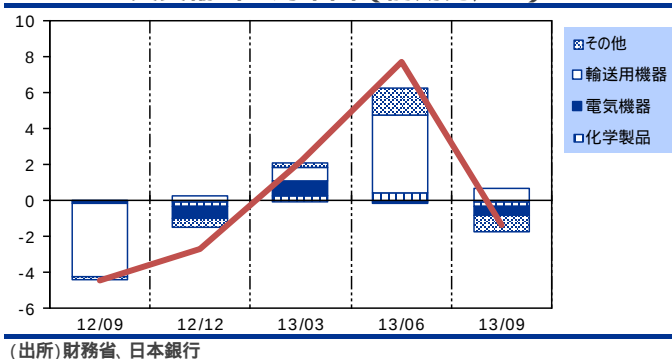
(3)米国向け

7～9 月期の米国向け輸出は前期比▲1.4%と3 四半期ぶりに減少した。但し、4～6 月期に7.7%も急増した反動が大きく、輸出水準は高い。加えて、輸出全体の4 割弱⁶を占め、全体の基調を左右する輸送用機器が7～9 月期も1.9%（4～6 月期11.8%）と4 四半期連続で増加した点も勘案すれば、米国向け輸出は増加基調を維持していると判断できる。但し、財政問題が再び深刻化し、経済主体の支出行動に更なる悪影響が及

ASEAN向け名目輸出の推移（前年比、%）



実質輸出：対米国（前期比、%）



⁴ タイ以外に前年水準を割り込んだのは、ラオス、ミャンマー。なお、表記は名目ベースであり、7～9 月期の輸出物価が前年比13.6%も上昇した点を勘案すると、実質ベースでは大幅な落ち込みになる。

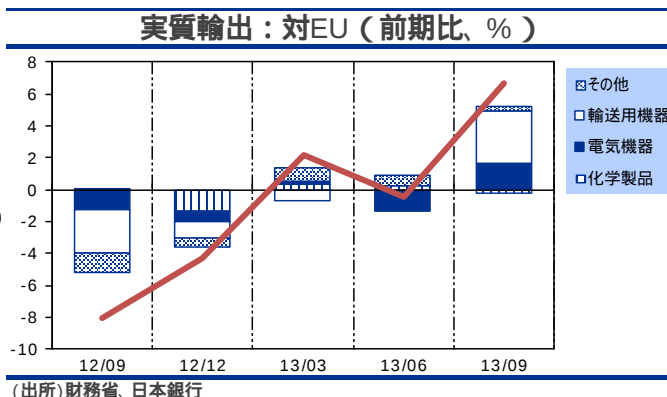
⁵ タイ経済の動向については9 月9 日付 Economic Monitor 「タイ経済：景気減速とパーツ安が安定成長の糧となるか」を参照。

⁶ 2012 年度の名目ベースによるウェイト。

ぶようであれば、日本の米国向け輸出が落ち込むリスクはある。

(4)EU 向け

EU 向け輸出は、ユーロ高円安もあり、7～9 月期に前期比 6.7%（4～6 月期 ▲0.4%）と大幅に増加した。過去 3 四半期で輸出水準を 9%弱も切り上げている。内訳を見ると、輸送用機器（7～9 月期前期比 18.0%）やはん用・生産用・業務用機器（5.8%）、電気機器（7.5%）など機械関連が総じて高い伸びを示している。財政問題が燃えるため、EU の経済成長には今後も多くを期待できないが、ユーロ高円安の寄与により、日本からの輸出は最悪期を脱した可能性が高い。



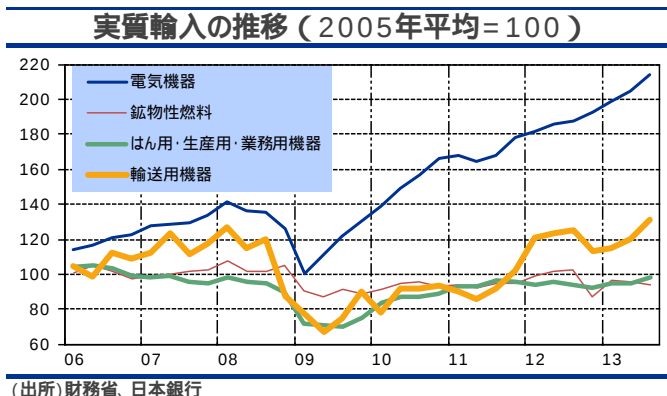
(5)その他

中東向け輸出は7～9 月期に前期比 ▲5.3%（4～6 月期 10.5%）と減少した。輸出の過半を占める自動車が含まれる輸送用機器が ▲10.3%と落ち込んだ影響が大きい。中東向け輸出は 2012 年後半以降、一進一退で推移している。7～9 月期のロシア向け輸出は前期比 ▲12.5%（4～6 月期 ▲10.6%）と 2 四半期連続で大きく落ち込み、輸出水準は 2012 年以降の最低を更新した。多くの品目が減少しているが、最近 2 四半期は、特に輸送用機器輸出の減少が目立つ。

2.輸入動向

実質輸入は7～9 月期に前期比 3.0%と 3 四半期連続で増加した。4～6 月期は、国内最終需要が前期比 0.9%と高い伸びを示したにも関わらず、輸入は低調で齟齬が生じていた。しかし、7～9 月期は、国内最終需要の拡大（当社予想では 0.7%）に加え、前期に低下した在庫水準の復元、消費税率引き上げ前の駆け込み需要に備えた在庫積み増しも寄与し、輸入が高い伸びを示したと言える。

品目別の輸入内訳を見ると、鉱物性燃料が前期比 ▲1.8%（4～6 月期 ▲0.9%）と 2 四半期連続で減少したのを除き、ほとんど分類で増加している。中でも増加が目立つのは電気機器（7～9 月期 4.7%）や輸送用機器（同 9.2%）、一般機械（同 3.2%）である。このうち、電気機器では半導体や通信機の輸入が顕著であり、日本企業の競争力低下やグローバル調達深化が寄与していると考えられる。7～9 月期の輸送用機器の増加には、航空機輸入の増加が大きく寄与したが、自動車部品輸入が拡大している影響も大きい。円安下ではあるが、電機と自動車のいずれでもグローバル調達が更に進捗していると判断される。



3.10～12 月期以降の見通し

7～9 月期は低調だった輸出だが、世界的に製造業循環は上向いており、また 7～9 月期の ASEAN 向け輸出減少の主因だったタイ向けも今後は回復が期待できる。米国財政問題の行方など下押し要因もあるため、

高い伸びまでは期待できないが、10～12 月期以降に輸出は増勢へ復帰する見込みである。

一方、輸入は、10～12 月期も、消費税率引き上げ前の駆け込み需要などが寄与し、高い伸びを維持する見通しである。2 四半期連続の輸入減少で鉱物性燃料の在庫水準が低下しているため、冬季の電力需要拡大に備えるかたちで、10～12 月期には鉱物性燃料の輸入も再び増加へ向かうと考えられる。